

大阪学院大学
外国語論集

第85号

| | | | |
|--------------------------|-------|------|----|
| watershedについて | …………… | 黒宮公彦 | 1 |
| 西欧精神の血脈—G・グリーンの『キホーテ猯下』— | …………… | 平松良康 | 21 |

2023年6月

大阪学院大学外国語学会

大阪学院大学
外国語論集
第85号

2023年6月

大阪学院大学外国語学会

watershed について

黒 宮 公 彦

1

『ウィズダム英和辞典』(第4版、三省堂、2021年)の“watershed”の項には次のように書かれている。

(1)

- 1 [[通例単数形で]] « 歴史・人生などの » 転機, 変革期, 分岐点 (turning point).
- 2 《(英) [[通例 the (9 o'clock) ~]] (午後9時の) テレビ放送転換点 《この時間以前は性や暴力などの映像を控える》。
- 3 《(地) 分水界 [嶺] 《(川の流れを分ける高い土地)》。

『ジーニアス英和辞典』(第5版、大修館書店、2014年)の同じく“watershed”の項には次のように書かれている。

(2)

- 1 [通例単数形で] [歴史・人生の] 分岐点, 転機 (turning point).
- 2 分水嶺 [界] ((米) divide).
- 3 《(英) [the ~] (子供の) 寝る時間 《通例夜9時; これ以降はテレビで子供にふさわしくない番組が放映されることがある》。

見てのとおり (1) と (2) では、第2項と第3項の内容が入れ替わっているものの、書かれていることはほぼ同じである。ここで、(2) と同じく大修館書店から出版されている『ジーニアス英和大辞典』（初版、2001年）の“watershed”の項を確認するとあることに気づく。

(3)

1 分水嶺 [界] ((米) divide).

2 ((米)) (河川の) 流域.

3 ((正式)) 一大転機, 重大な分岐点.

4 ((英)) (子供の) お休み時間《通例夜9時; これ以降はテレビで子供にはふさわしくない番組が放映されることがある》.

(3) には (1) や (2) に記載のない「(河川の) 流域」という語義が加えられていることが一目瞭然である。『ジーニアス英和大辞典』にこの語義が記載されており『ウィズダム英和辞典』『ジーニアス英和辞典』には見られないということは、この語義は大辞典クラスの辞書には記載されるべきだが中辞典クラスの辞書に記載するほどのものではない、換言するとそれほど使用頻度は高くないということを意味する。しかしそれは本当なのだろうか。(3) ではこの語義が第2項に挙げられていることを考慮すると頻度は決して低くないのではあるまいか。この点を明らかにするのが本稿の目的である。

2

2.1 OEDの記述

まずは『オックスフォード英語辞典 (The Oxford English Dictionary)』（以下 OED と略記する）の“watershed”の項を確認しておこう。

(4)

1. The line separating the waters flowing into different rivers or river basins; a narrow elevated tract of ground between two drainage areas: = WATER-PARTING.
2. *loosely*.
 - a. The slope down which the water flows from a water-parting.
 - b. The whole gathering ground of a river system.
3. [? Associated with SHED v.¹ 4 d.] A structure for throwing off water.

*OED*に「成人向け番組を放映してよい境界の時刻」はおろか「分岐点」の語義すら掲載されていないのは驚くほかないが、いずれにせよ watershed の本来の意味は「分水嶺」であることが分かる。加えて2.b.にある“The whole gathering ground of a river system.”とはまさに流域のことであり、*OED*がこの語義の19世紀の用例を示している¹ことから、古くからある語義であることが確認される。

2.2 「分水嶺」とは

次に、そもそも「分水嶺」とは何かについて確認しておこう。

ある山に北斜面と南斜面とがあるとす。そこに雨が降ると、北斜面に降った雨水は北斜面を流れ落ち、いずれ川に流れ込む。南斜面に降った雨水も南斜面を流れて、そちら側の川に合流する。すると、山の頂上付近に、雨水が北斜面と南斜面のいずれを流れることになるかの分かれ目となる境界線が必ず存在することとなる。これが分水嶺だ。分水嶺付近に降る雨は、落ちた場所が1メートルしか離れていないのに、最終的に一方は日本海に、一方は太平洋に流れ着くということもあり得る。

以上から分水嶺とは高山の頂上付近にあるものと思いがちだが一分水「嶺」という訳語がこの誤解に拍車を掛ける一大した高地でなくとも、周囲よりも少し高くなっているところであれば雨水の流れの境界となることはあり得る。つ

まり必ずしも分水「嶺」ではないため、分水「界」という用語が用いられることも多いようだ。(1)では「分水界 [嶺]」、(2)と(3)では「分水嶺 [界]」という訳語が与えられているのもこのような事情によるものと思われる。

ところで、山に降った雨が集まって小さな流れとなり、それらが集まって小川となり、下流へと流れていくに従って合流し次第に大きくなり、最終的には大河となって海や湖に注ぎ込む。この総体を「水系」という。水系とはその名のとおり水のみに着目した用語だが、川が流れる周囲の土地も含めた領域のことを「流域」という。そして水系の始まりは山に降る雨なのだから、分水嶺(分水界)は「水系と水系の境界」なのである。このように分水嶺、水系、流域は密接に関係し合っている。

(4)に見るように *OED* の2. は本来の語義 (= (4) の1.) の緩用だ (loosely) と断った上で、a. 分水嶺から水が流れ落ちる傾斜(坂)のことで、b. 水系の流域全体のこと、と述べている。しかし実際の用例を観察すると流域の全体ではなく一部地域に対して *watershed* が用いられることが非常に多い。そして「分水嶺から水が流れ落ちる傾斜」も流域の一部であることを考えると、*OED* の2.a. と2.b. の語義の区別は必ずしも明確ではない。もう少し正確に言うと、*watershed* の語義を「流域の全体または一部」と捉えたら2.a. も2.b. も、さらに「流域の(必ずしも分水嶺付近とは限らない)一部」という意味もすべて含まれることになるということである。

3

では *watershed* は実際にはどのような意味で用いられる語なのだろうか。本節ではコーパスを利用した観察を通してこの点を明らかにしていきたい。

(4)に見るように *OED* は2.b.、すなわち「流域」の語義についてアメリカでの用法だといったことは特に述べておらず、イギリスでも使用される可能性はある。² しかし『ジーニアス英和大辞典』は(3)に見るようにこの語義に対して(米)のラベルを表示している。ここではひとまず『ジーニアス英和大辞典』

の記述を受け入れることにしよう。

そうなる調査にはアメリカ英語のコーパスを利用する必要がある。本稿では *Corpus of Contemporary American English* (以下 COCA と略記する) を使用することとする。以下に示す例文で特に断りがなければ COCA から採ったものとお考えいただきたい。なお COCA は用例を検索語を含む文単位で示すのではなく、検索語の前後のそれぞれについて13語程度(ピリオドを越えることもある)を示す形式のものである。場合によっては watershed の意味が分かりづらいこともあるため、以下必要に応じて先行文脈を補うこともある。また逆に検索語を含む文の文頭よりも前、あるいは文末よりも後の語(つまりピリオドを越えたところにある、直前直後の文に含まれている語)を省略することもあることをあらかじめお断りしておく。

3.1 調査方法

本研究では COCA を用いて watershed を含む用例をランダムに200例抽出した。その上でそれらを観察することにより実際に使用される watershed の語義を確認し、それぞれの語義が使用される割合を調査した。

なおここまでで述べてきたことから考えて、コーパスに現れると予想される語義は大きく分けて「分水嶺」「分岐点」「流域」の3つであることに注意してほしい。「成人向け番組を放映してよい境界の時刻」という語義はイギリス英語であり、COCA はアメリカ英語のコーパスなのだからこの語義の用例は COCA には現れないだろうと予想される。そして実際にもこの語義の用例は見られなかった。

また、実際に調査すると1つの用例に watershed が複数回現れるものも見られた。具体的には2回現れているのが12例、3回現れているのが3例あった。したがってランダムに抽出した200例の中に watershed は218回見つかったことになる。しかし同一の用例の中に「分水嶺」の watershed と「分岐点」のそれとが共起することは考えにくい。そして実際の観察でも1つの用例に含

まれる複数の watershed はすべて同じ語義を表していた。このため1つの例に複数の watershed が含まれていたとしても watershed の語義について考える場合には1つと勘定することにする。他方次の3.2.1節に見るように watershed の語形について考える場合には218例のすべてを対象とする。

3.2 調査結果

3.2.1 watershed の語形

watershed の218例のうち複数形の “watersheds” は2例見られただけで、残りの216例はすべて単数形だった。そのうち所有格の “watershed’s” が1例見られたが、それ以外は “watershed” の形で使われていた。

ここから watershed は単数形で用いられることが圧倒的に多いと考えられる。

3.2.2 watershed の語義

最も多く認められた語義は「流域」であり、200例中136例（68.0%）を占めた。それに次ぐのが「分岐点」の58例（29.0%）で、これら2つで194例（97.0%）を占めた。逆に明らかに「分水嶺」の例だと判断されたのは3例しかなかった。加えて「流域」か「分水嶺」か判断しかねたものが1例認められた。「分水嶺」の3例を以下に示す。

(5) a. It stood alone, its roof spread out against the sky, on the watershed, the high spine between two opposed territories.

b. [...] the GR 10 from the Mediterranean to the Atlantic, a trail that follows the watershed spine of the mountains so closely that one often has one foot in France[.]

c. [...] an illegal track farther upriver to drag mahogany logs over the divide to an adjacent watershed.

もつとも (5c) の例で分水嶺を表しているのは厳密に言うとは *divide* で、*watershed* は (4) で見た「分水嶺から水が流れ落ちる傾斜」を意味していると考えべきだろう。あるいは「水系全体」を意味している可能性もある（もつともこの場合でも山頂付近の流れを念頭に置いているだろうが）。このように厳格な意味で分水嶺を捉えると該当する用例はいよいよ少なくなる。逆に分水嶺を緩く捉え、山の比較的頂上付近の川の流れやその周囲の土地を指す *watershed* を「分水嶺を表している」と見なすならば分水嶺の用例はある程度は増える。とりわけ次の (6a) は先述した「流域」か「分水嶺」か判断に迷った例である。

(6) a. [...] I was climbing at 18,000 feet in the upper reaches of the Imja River watershed, near where Erwin Schneider had taken one of his photographs.

b. In freshwater ecosystems, sediment biota are routinely affected by nutrients and particles from organisms in distant parts of the watershed or upstream[.]

しかしながらこうした山頂付近の川の流れを指す *watershed* は、(6a) の例も含め、私の考えでは流域であって分水嶺ではないと思う。こうした *watershed* の例のほとんどでは分水嶺も含まれているように思われることは確かだが、それでも「雨水がどちらに流れていくかを分ける場所」を問題にしているのではなく、単に「川の最も上流の部分」もしくは「川に注ぐよりも前の水の流れ」のことを指しているに過ぎない。仮に *watershed* という語を知らない英語学習者がこうした用法の *watershed* を含む例文を目にしたとしよう。この学習者が辞書を調べて「分水嶺」という語義を知ったとして、それが山頂付近の流れやその近辺のことも意味すると推測できるとは思えない。ここから少なくとも (6b) は次節に見る「流域」の例と見なしてよいと私は考え

る。あるいは(6a)でさえも「流域」の例と見なすべきなのかもしれない。

ちなみに上で私は「流域」の用例は136例見られたと述べたが、この中に(6b)は含めたが(6a)は含めずに判断保留とした。この1例も「流域」に含めるなら137例が見られたこととなる。

3.2.2.1 「流域」について

次に「流域」の意味で用いられている例を見てみよう。

(7) [...] farmers didn't have to accidentally dump millions of gallons of pig sewage into the watershed every time their waste lagoons got full.

この文は豚の飼育が行われている地域での状況を描写しているのだから、この watershed は山頂付近の分水嶺を意味するのではなく、それどころかそれほど高地でない分水界を指すのですらなく、水系や流域を表していることは明らかであろう。しかも分水嶺から始まって海や湖に注ぐまでの水系や流域の全体を指しているのではなく、養豚が行われている場所の周辺のみが考慮の対象となっていることもまた明らかである。

すでに述べたとおりコーパスからランダムに抽出した200例のうち136例が流域という語義で用いられていたわけだが、この(7)のようなものが最も典型的な例と言える。以下さらにいくつか用例を挙げる。

(8) a. The loss of lakes in watershed development also weakens the linkage between streams and the ocean.

b. The 64,000-square-mile Chesapeake Bay watershed, originally home to Native Americans and later to the few English settlers [...]

c. The incentive to radically transform the lower Snake River watershed from a small-scale agrarian society to large-scale agribusiness

was an issue of economic growth[.]

(8a) では湖や海洋が現れるのだからこの watershed は明らかに分水嶺ではなく水系や流域を意味している。さらに (8b) では watershed が「チェサピーク湾に注ぐ水」という観点から捉えられている。既述のとおり水系とは最終的に一つの川となって海や湖に注ぐ水の流れの総体のことだと私は理解しているのだが、チェサピーク湾に注ぐ川は数多く存在しているのであり、したがって (8b) の watershed はそうしたチェサピーク湾に注ぐ複数の川のそれぞれの流域をすべて合わせたもの (64,000平方マイルにおよぶという) を指しているのだと考えられる。異なった複数の川はそれぞれ異なった分水嶺に端を発しているだろうから、この watershed が分水嶺を表すことはあり得ない。むしろ逆に (実際にはあり得ないが) チェサピーク湾に端を発し、上流へと遡っていく数々の川の流域の総体が watershed と表現されているのだと捉えた方がこの watershed は理解しやすいように感じられる。またそう考えなければ “the Chesapeake Bay watershed” という句は解釈できないのではないか。以上から bay、gulf、ocean、river といった語と共に起する watershed は「流域」の意味で用いられていることが多いと推測される。

流域と人間の営みの関係を考えさせられる用例も多く見られた。(8c) はその一例だと言える。川は人に飲料水や農業用水をもたらす。また人だけでなく家畜も水を飲む。要するに川の流域とは農業や畜産に適した、居住しやすい土地だということだ。したがって「流域」の語義を表す watershed は (8c) のように農業、あるいは (7) のように畜産と結びつくことが多い。分水嶺は山の頂上にあることが多いため居住や農業の文脈で現れるとは考えにくく、これはやはり「流域」と解釈されねばならない。地域住民の暮らし、飲料水、農業、灌漑(用水)、畜産、あるいは治水といった文脈で用いられる watershed は流域を表しているのが普通である。

他方、川の流域は人が住みやすいだけでなく、多様な生物を育む場でもあ

る。環境問題に対する近年の意識の高まりを反映してのことだろうが、「流域」の語義が環境や生態系、あるいは自然保護活動の文脈で用いられている例も多数観察された。(6b)にも *ecosystems* という語が現れていることに注目しよう。

ところで、現在でこそ電車・自動車・飛行機が発達しているが、これはこの100年足らずの間に起きた変化にすぎず、それ以前には水運こそが物流の要だった。しかしながら COCA に集められているのは現代の文例ばかりであるためか、水上輸送の文脈で用いられている *watershed* の例はほとんど見られなかった。川を利用して丸太を運搬することを示す (5c) はその珍しい例である。丸太は水がある限り浮かべて運ぶことができるが、分水嶺付近では丸太を浮かべられるような流れがないので、水系から別の水系へと人力で運んだものと思われる。これは分水嶺をまたぐ作業であるので当然のことながら山越えを伴ったはずである。このように水運が物流の主役だった時代には分水嶺は特殊な役割を担った地形だと認識されていたと考えられる。時代とともに水を利用しない輸送が増加すると、それに伴って「分水嶺」の語義の *watershed* の用例が減少したのかもしれない。

3.2.2.2 「分岐点」について

上述のとおり *watershed* が「分岐点」の語義で使用されていたのは58例で、「流域」の半分にも満たなかった。それでも *watershed* の主要な語義であることは確かである。ではこちらの例も確認しておこう。

(9) It's not difficult pointing out the watershed moment of his eight-year tenure as the team's general manager.

「分岐点」の58例中、(9)に見るように *moment* が後続するものが14例（うち1例は複数形の *moments*）を占めた。また *event* が後続するものも9例（直後に “*political event*” を伴うものを含めると10例）認められた。これ以

外に比較的多く見られたのは election（3例）である。

いずれにせよこの語義での watershed は名詞の直前に置かれて形容詞的な役割を果たすものが圧倒的に多い。すなわち「分岐点となった瞬間／出来事／選挙」といったように、である。それ以外の用法としては次のようなものが見られたが、わずか4例に留まった。

(10) a. The eighteenth century is the watershed of mankind's material progress.

b. [T]his last '94 election was a watershed for our party[.]

c. Although 1977 served as the watershed, it was in 1967, [...]

d. What began as an ordinary gray day in Moscow ended as a watershed in Soviet history.

(10a, b) は be 動詞の補語の位置に現れるものであり、叙述用法と言ってよいと思われるが、2例のみだった。また (10c, d) に見るように、こちらも2つのみだが、as に導かれている例が見られた。

3.2.2.3 その他の語義

以上で全200例中198例について見たが、残りの2例は次のようなものだった。

(11) a. The spinal canal is extracted using a watershed algorithm and directed acyclic graph search.

b. Good, simple American flavors from the days before processing: Only Watershed gets this.

私はコンピュータに関しては素人なので正確な解釈は手に余るが、コン

コンピュータの画像処理の分野で用いられる技術の中に watershed algorithm と呼ばれるものがあるようで、(11a)の watershed はそれを指しているのだと思われる。つまり専門用語であり、watershed の語義としては特殊なものだと言ってよいだろう。

また(11b)の Watershed は飲食店の名前（つまり固有名詞）のようである。

3.3 第二の調査

watershed の語義はそれぞれどのような語と共に起る傾向が認められるかについて、ある程度のことは3.2.2.1節および3.2.2.2節で述べた。しかしこれは COCA から採った200例に私が実際に目を通した上で感じたことを述べたものであり、要するに多分に私の直観に依拠するものである。とりわけ「分岐点」の用法についてはある程度傾向が認められたものの、「流域」については用例も多く「分岐点」ほどは顕著な傾向を感じ取ることができなかった。

そこでより客観的な結果を導き出すために第二の調査を行った。COCA を用いてランダムに集めた watershed を含む200の用例にはどのような名詞が含まれているかを調べた。この調査には英語形態素解析ソフト TreeTagger³ を使用し、TreeTagger の分析結果を処理するために統計解析ソフト R を利用した。なお集計の際には語形を語彙素に直した上で（つまり複数形はすべて単数形にした上で）集計したことをあらかじめお断りしておく。

3.3.1 調査結果

3.3.1.1 再び「流域」について

「流域」の語義の watershed と共に起る名詞のうち頻度の高いもの（6回以上現れた語）は次のとおりとなった。ただしすでに指摘したように1つの用例に watershed が複数回現れる用例が見られたが、それは「watershed と共に起る名詞」には含めなかった（ちなみに watershed と共に起っていた watershed は14例あった）。また大文字で始まる語も見られ、これはつまり固

有名詞の一部を成しているということだが、それらは以下括弧つきの数字で示す。

(12) water 30 (4), river 23 (15), state 12 (4), bay 11 (9), area 10, community 10, management 10 (3), district 9 (6), land 9, city 8 (2), protection 8 (3), county 7 (5), plan 7, research 7 (3), conservation 6 (3), creek 6 (5), ecosystem 6, forest 6 (1), lake 6 (2), percent 6, program 6, project 6 (1), soil 6, university 6 (6)

例えば river は watershed の前後に23回現れたが、そのうち15回は大文字で始まる River であり “the Santa Clara River” のような形で用いられているということの意味する。したがって area は10回現れたが、大文字で始まる例は見られなかったということである。

これを見るとまず、川や水域を表す語が多いこと、また一部の語は固有名詞として現れている比率が高い (river は23回中15回、bay は11回中9回) ことが分かる。water、river、bay に加えて creek や lake も該当する。次いで state、community、district、city、county のような行政区分や地域社会を表す語、あるいは land や forest のように自然界の地形を表す語が多いことが見て取れる。area もこれに該当するだろう。

川は流域の住民の暮らしに影響を与えるから調査 (research) が行われ、それは大学 (university) などの研究機関が主導することもある。川は土壌 (soil) にも影響を及ぼし、その逆に土壌もまた川の水質に影響を与えることだろう。地域住民は治水をし (management)、川が育む生態系 (ecosystem) を保護し保全する (protection、conservation) よう計画 (plan、program、project) を立てて取り組む。これが watershed と共起する名詞から浮かび上がる watershed の姿であり、これはどう考えても山頂付近の分水嶺を指す語ではない。これは多数の住民が暮らし、農業や牧畜を営む平地での話であり、

こうした watershed は「流域」を表していると考えねばならない。⁴

5回現れた名詞も興味深いので挙げておく。(12)で挙げたものと比べると頻度が下がるので大文字で始まるかどうかは考慮しなくてよいだろう。

(13) council, development, effort, fish, nitrogen, people, restoration, scientist, study, tree, year

watershed と共起する形容詞も興味深いものがある。とはいえ最も頻度の高かった new (10回) は watershed との関係が見えづらいので、比較的頻度の高かった語のうち興味深いもののみを選んで挙げておく。

(14) natural 8, public 7, environmental 6, local 4, agricultural 3, national 3

3.3.1.2 再び「分岐点」について

COCA から採った200例中「流域」の用例が136だったのに対して「分岐点」は58であるから、共起する名詞の集計結果も数値は当然低くなる。比率で考えると「分岐点」で3回現れていたならそれは「流域」で7回現れたものに匹敵すると見なしてよいだろう。いずれにせよ watershed と共起していた名詞のうち3回以上現れたものは次のとおりである。なお「流域」の語義と同様、1つの用例に watershed が複数回現れる用例が見られたが、それは含めていない(ちなみに4例あった)。

(15) moment 15, event 12, election 6, year 6, history 4, life 4, behavior 3, case 3, day 3, judgment 3, New 3, professor 3, time 3, York 3

New と York とがそれぞれ3回ずつ現れているが、これはもちろん New York のことである。例文を確認したが分岐点の語義と深く関連しているとは

判断されなかった。

では関連が深いと思われる語を確認しよう。見てのとおり3.2.2.2節で指摘した **moment**、**event**、**election** が上位を占めた。3.2.2.2節では **watershed** の直後に用いられていた名詞に限定したが、検索の範囲を広げてもやはりこうした語が上位に来ることが分かる。

これ以外には **year** と **day** が見られるのが興味深い。分岐点となった年や日など、時を表す表現—これには **moment** も該当する—がしばしば共起することが見て取れる。(10b, c) でも **year** という語は現れないものの、その代わりに '94や1977といった年を表す具体的な数字が現れていることに注意しよう。こうした具体的な数字はコンピュータを用いた機械的な処理では **year** の例として勘定されることはないが、こうしたものも含めれば年を表す語句の出現頻度はもっと高くなると考えられる。

さらに **case** と **judgment** の頻度が比較的高いことも重要だ。すでに見たとおり「分岐点」の **watershed** は選挙の文脈で用いられることが珍しくないが、それに加えて裁判の文脈でも使用されることが判る。**case** の3例のうちわずか1例ではあるが“**Supreme Court case**”の形で用いられていたことも付言しておこう。

4

前節での調査は、**watershed** は「流域」という語義で用いられることが極めて多いことを示している。では本稿冒頭で触れたもの以外の英和辞典の記述はどうなっているのだろうか。さらにいくつかの英和辞典について記述を確認しておこう。

(16) 『アンカーコズミカ英和辞典』(初版、学習研究社、2008年)

1 分水界 [線].

2 [比喩的に] (事態などの) 重大な分岐点; 転機.

3 [the ～] (英) テレビ番組境界時間. (通例午後9時以降のおとな向き番組と、暴力シーンなどを控えた子供向き番組の放映切り換え時).

(17) 『オーレックス英和辞典』(第2版、旺文社、2013年)

1 〈…における〉分岐点, 転機

2 『地』分水嶺 [界]; (河川・湖などの) 流域

3 ((the ～) (英) ウォーターシェド (the 9 o'clock watershed) (子供に悪影響のあるテレビ番組の始まる時刻. 通例午後9時))

(18) 『コンパスローズ英和辞典』(初版、研究社、2018年)

1 (重大な) 分岐点; 転機.

2 ((米) (川の) 流域.

3 分水線, 分水界.

the (9 o'clock) watershed [名] (英) 子供が見るべきではない番組が始まる(夜9時の) 時刻.

このように(17)や(18)は「流域」の語義を採録していることが判る。

5

本稿ではCOCAを用いた観察を通して watershed の語義について考察した。その結果、「流域」の意味で用いられることが圧倒的に多いこと、「分水嶺」の意味で用いられることは極めて少ないことを示した。さらに「流域」の用例は「分岐点」の用例よりもかなり多いことも示した。この結果を踏まえて、学習者用英和辞典の“watershed”の記述に修正を加えることを提案したい。前節で確認したようにすでに「流域」の語義を採録している学習者用辞典も現れてきている。

なお、「分水嶺」の用例が少ないことは事実だろうが、だからと言って学習

者用英和辞典の“watershed”の記述からこの語義を削除すべきだとは私は考えない。「流域」と「分岐点」とが並べられているだけではこれら二つの語義の関連性が分からない。元来 watershed は分水嶺を意味する語だと知ることによって流域と分岐点とを結び付けることができる。また流域は流域でも山頂付近の流れを指すことも少なくなく、単に流域という語義を知っているだけよりも「本来は分水嶺を意味する語だ」とも知っておく方が遙かに豊かに watershed の持つニュアンスを捉えることができるはずである。この意味でも「分水嶺」の語義は記載されるべきだと思う。

それはそれとして、(8b) や (12) で見たように watershed は bay と共起することが少なくないのだ。「ある水系と別の水系との境界線である分水嶺」というよりは「分水嶺から始まり海に注ぐまでの水系、およびその周辺の地域を含んだ全体」を指すと捉えておくことが watershed という語の理解には欠かせないと私は考える。

注

- 1) 文献初出とされているのは1874年の“The Missouri Region, in its broadest sense, as embracing the whole watershed of that great river and its tributaries.”という例である。また *OED* は1880年に出版された Webster の辞書の補遺に water-shed が採録されているとし、その例文も掲載している。因みにこの「Webster の辞書」とは Noah Webster が編集した *An American Dictionary of the English Language* を、Webster の死後 Chauncey Goodrich が改訂した *New and Revised Edition* のことであり、1864年以降に刊行されたのだが、そのうち補遺は1880年に出版された。このような事情を考慮すると「流域」の watershed が1880年当時には現れて間もない用法だと認識されていたと推測され、1874年の用例はその最初期のものだと考えられる。
- 2) 上記注1で確認したように1874年の用例はミズーリ川の流域に関するも

の、また1880年に出版された Webster はアメリカの辞書であり、ここから推測すると「流域」の語義はやはり主にアメリカで用いられるのかもしれない。

- 3) 日本語の文章（に含まれる一つ一つの文）を語に分解するソフト（MeCab がその代表例だと言ってよいだろう）は通常「日本語形態素解析ソフト」と呼ばれる。そして TreeTagger は英語の文章に対して日本語形態素解析ソフトと類似の処理を行うため「英語形態素解析ソフト」と呼ばれることが多い。このためここでは慣例に従っておくことにする。とはいえ TreeTagger が行うことを言語学的に考えると「語彙素解析ソフト」「品詞タグ付けソフト」などと呼ぶのが適切であろうと思考する。
- 4) なお (12) で 6 回現れている “percent” について補足すると、流域に関する様々な数値に対して用いられており、percent の対象は文脈による。例えば “Approximately 12 percent of the catchment area of the Balamban watershed [...]” という例では流域の集水量、“Loggers will have to leave 15 percent of the trees in every watershed they cut.” という例では流域に自生する木の量に対して用いられている。

参考文献等一覧

- 『アンカーコズミカ英和辞典』、初版、山岸勝栄（編）、学習研究社、2008.
- 『ウィズダム英和辞典』、第4版、井上永幸・赤野一郎（編）、三省堂、2021.
- 『オーレックス英和辞典』、第2版、野村恵造・花本金吾・林龍次郎（編）、旺文社、2013.
- 『コンパスローズ英和辞典』、初版、赤須薫（編）、研究社、2018.
- 『ジーニアス英和辞典』、第5版、南出康世（編）、大修館書店、2014.
- 『ジーニアス英和大辞典』、初版、小西友七・南出康世（編）、大修館書店、2001.

Baayen, R.H. (2008), *Analyzing Linguistic Data – A Practical Introduction to Statistics using R*, Cambridge: Cambridge University Press.

Corpus of Contemporary American English

<https://www.english-corpora.org/coca/>

Gries, Stefan Th. (2013), *Statistics for Linguistics with R*, 2nd ed., Berlin/
Boston: Mouton De Gruyter.

—(2017), *Quantitative Corpus Linguistics with R*, 2nd ed., New York/
London: Routledge.

英語形態素解析ソフト TreeTagger

<https://www.cis.uni-muenchen.de/~schmid/tools/TreeTagger/>

統計解析ソフト R

<https://www.r-project.org/>

On Watershed

Kimihiko Kuromiya

The Oxford English Dictionary defines one of the senses of *watershed* as “the whole gathering ground of a river system.” On the basis of a research conducted using *Corpus of Contemporary American English*, this article shows that the word *watershed* is used most frequently in that sense, at least in American English, in spite of the lack of any mentions of the sense in most of the English dictionaries for advanced learners published in Japan.

西欧精神の血脈 —G・グリーンの『キホーテ猯下』—

平 松 良 康

G・グリーンは弁証法的な懐疑家である。西欧の懐疑主義に対する彼の理解と共感の深さ、神秘主義の伝統への彼の情熱的な敬意の流露を以下、晩年の作品を通して跡付けて行きたい。G・オーウェルは彼が「過激な保守派」、「ありふれたカトリックの反動主義者」などではなく、「微かに共産党の傾向を持つ穏健な左派」であり、「カトリックで最初の我らの同調者、英国には居ないけれどもフランス等に居る」(Vol. 4, 558) 類の作家だと書いた。的確な評言だが、そのグリーンの複雑な特徴を端的に示して居るのが、晩年の痛快な小説『キホーテ猯下』(1983)である。無論、これはセルバンテス作『ドン・キホーテ』の深遠な現代版パロディーに当り、フランコ総統死後のスペインに於て、カトリックの田舎司祭キホーテと共産主義者の元市長サンチョとの奇妙な旅と対話とが、主筋を織り成して居る。

原作『ドン・キホーテ』の主従の遍歴に劣らず、その主役二人の会話と行動とは滑稽で刺激的なのだが、グリーンは彼のサンチョをキホーテ神父以上の知識人に仕立てた。それ故、両者は互角に、いや度々従者が優勢に議論を展開し、作中にマルクスの『共産党宣言』は勿論、神父の愛読書として数多の聖人の著述や、哲学者への言及が驚く程現れる。宛らカトリックの教義とマルクス主義思想との論争を足早に辿る、西欧精神史の概要の様であり、娯楽小説が好む主題の範囲を遙かに超えて居る。M・ロベールは、セルバンテスの小説から「一つの神学便覧の印象」(61)を受けると書いたが、グリーンはこの小説にもその言葉は当て嵌まる。然も、哲学者のウナムノやデカルトに関しても言及さ

れるから、西欧の合理主義や懐疑主義の伝統に疎い日本の読者には、難解な作品なのである。

だが、西欧精神の血脈の面倒な講釈を抜きにしても、読者は主人公の冒険を心底楽しみ、彼らに間々共感させられる、左様な奥深い滑稽譚としてこの小説は成功して居る。それは身近な愛と死とに関する真摯な疑問がこの小説に貫徹して居るからに他ならない。宗教と政治との意匠に紛れては居ても、その愛と死とを巡り先人が繰り返した自問自答に注意を向けねばならない。愛の至難と死の苦悶とが自己の運命に押し掛かり、この葛藤を解消する道は絶望的に見出せないが、先人を真似び自らの苦悩を引き受け、決然と歴遊する二人の姿は美しい。現代の「憂え顔の騎士」は、先祖の遍歴の騎士程自信に満ちては居ないが、それでも西欧の伝統精神に孜々として殉じた多くの聖人を模して奮闘する、剛毅な勇者たる事に変わり無いからである。

愛と死の主題は、第一部第一章「キホーテ神父は如何にして猓下となりしか」に於いて、イタリア人司教との会話の中で早速暗示される。この司教が難儀して居た所を助けた所為で、キホーテ神父は不本意にも猓下に推挙される事になる。孤独な神父は古びた愛車をロシナンテと呼び慈しみ、その行末を案じて、持ち馬の幸福の比喩を以て人間ならざる物への愛の正当性、信仰上の可否を司教に尋ねる。司教は「馬の良き死なるものがどの様な意味かは解らないが」と断り、人間の死に就いて返答する。「人間にとり良き死とは、神との交りの内に、永遠の約束の中での死を意味します」(19)と。これはこの小説の結尾に就て、重要な意義を持つ反語的予言である。人間への愛を感得出来ずに悩む神父の、挙句教区司教から聖餐の司式を禁じられ、逃亡犯として自動車事故により不慮の死を遂げる末路悲惨など評価せぬかの如くに聞える。その最期は神との親交を断たれ、永遠の約束も拒まれた無用の司祭の悪しき死に様に過ぎぬ様にも見える。そして、この大団円は原作『ドン・キホーテ』最終章の臨終場面とは対照的に、教会への痛烈な風刺として描かれる。原作の騎士は正気を取り戻し、善人として教会に受け入れられ、告解の後安らかに、先の司教の説

く「良き死」を受容する事になるからである。

けれども、死の良し悪しは、畢竟人間の相対的判断ではないか、とグリーンは述べたいのだ。この小説の題詞にグリーンは、『ハムレット』第二幕二場の主役の台詞、「もともと、良い悪いは當人の考へひとつ、どうにでもなるものさ。」(シェイクスピア 66) を揚げた。そして、人間と神とでは無論、善悪の「判断は同一ではない」(Greene 57)。当のキホーテ神父の認識は扱置き、亡くなる神父を見守る人々の反応も様々だ。事故で昏睡した神父は、収容された修道院の祭壇で、夢遊病の儘、幻覚のミサを進行し、相棒のサンチョに聖体を授けて幸福に死んで行く。この臨終間際の無意識の行為を目の当りにして、手当を尽した修道院のレオポルド神父は、教会組織とは見解を異にする。キホーテ神父が最愛の友人の為にした事は、イエスの言葉、「その友のために己の生命を棄つる」「より大いなる愛はなし」(ヨハネ伝第15章13節) に忠実な行動だと見做し、旅路を共にした主従に満腔の敬意を表するのである。因みに、ヨハネ伝はキホーテ神父の愛誦する詩的な福音であり、「地獄への言及が一回も無い」(58) 点が、地獄なる語句の頻出する恐怖の福音マタイ伝とは異なり神父に好まれる。

一方、サンチョはロシナンテの残骸と神父の亡骸とを前にして、唯物論者らしく割切り気持ちを整理しようとするが、恐しい不安が過る。「金属の塊と粉々に砕け散る頭脳。一種凶暴なまでに市長はその類似性に拘り、確實性の為に苦闘して居た。人間として機械なのだと。だが、キホーテ神父はこの機械に愛情を感じて居た。」(255) 金属片も死体も物質に過ぎないと、キホーテ神父が死んだ今、もはや従者ならぬ共産主義者の友人は、己を納得させようとする。だが、真実人間が機械の様に確かで、非合理的な所が無いのなら、友情などの曖昧で不確かなものに支配される道理がない。事実、幻の聖餐式の際サンチョは自己の信条よりも友人への愛を優先し、「神父さんに安らぎを得させる為ならどんな事でも、何でも」(250) すると決意し、捨てた信仰に復したかの如く聖体拝領の為に跪いたではないか。真に肉体の終焉が「最後の別れと最終的な沈

黙」であるなら、「市長がキホーテ神父に感じ始めて居た様な愛」は、どうして「今も生きて居り成長して居る様に感じられるのか」。グリーンはこの小説を次の様に結ぶ。「市長は或る種の恐れを懐きながら不思議に感じた。どれ位長い間、自分のこの愛は継続し得るのか、そして、どんな終着に到るのかと。」(256) 元市長が放蕩息子よろしく信仰に立ち返り、キホーテ神父が家政婦に述べた様に、「キリスト教徒には、永遠の別れなどあり得ない」(197) から神父と懐かしい再会を果す「終着に到るのか」、それは解らない。明白なのは、頑固な合理主義の唯物論者の心をも動かす強力な愛の不可思議に、元市長が動揺して居る事である。グリーンは自分の洗礼名として懐疑家の「デドモと称ふるトマス」(ヨハネ伝第20章24節)を選んだが、この結末には懐疑家の作者らしい未決の強迫観念が感じ取れる。

現実には、友愛の「継続」と「終着」への「恐れ」に関して元市長と同様の心理を経験した著名人が居た。嘗て共産主義を信奉した作家の M・マゲッリッジである。マゲッリッジがサンチョだとすれば、キホーテ神父に当るのは、懐疑に悩む者の守護聖女マザー・テレサ(コルカタの聖テレサ)となる。マゲッリッジは英国 BBC の為にマザー・テレサに密着したドキュメンタリー番組『すばらしいことを神さまのために』の司会進行を務めた。この才人は、オーウェルの言葉に依ると「嘗てのコミュニストであり、覚醒のお決まりの過程を経て共産主義に幻滅する様になり」、「英国嫌悪が突然猛烈に親英国派になる」「かなりあり触れた」(Vol. 3, 422) 系統に属する作家である。オーウェルの見る所、マゲッリッジの或る「著作の要旨は伝道之書からの二つの文章に含まれ」て居て、それは「空の空なるかな」と「神を畏れよ」とであるが、彼は自身の信仰に就いては示さず、キリスト教が「人間の頭から消失しつつある事を当然の如く見做し」、「戦争に継ぐ戦争、革命と反革命、ヒトラーの如き支配者と超ヒトラーの輩」などの暗い未来の予想を「楽しんで居るのではないかと怪しむ」(Vol. 2, 31) と評さざるを得ない。マゲッリッジはキリスト教に対する認識と曖昧な態度、皮肉な批評精神、能弁多才の類稀な資質の点で、元市長の

サンチョと酷似して居る。サンチョは若い頃、神父を目指して一流大学で神学を学ぶ途中で棄教した、徹底的な合理主義の冷笑的理論派である事を想起すべきだ。マゲッリッジならではの犀利な評言を『マザー・テレサ すばらしいことを神さまのために』から抜粋しよう。

マザー・テレサが教会の現状を見る見方をどうにも受け入れることができないでいるわたしのちゅうちょや疑問、死すべき人間の構成している位階制や司祭職が作りもし、傷つけもし、維持もし、崩壊もさせるそういう制度ではないものとして教会を見ることができないでいるわたしのことは、マザー・テレサにはわかってもらえない。(68)

キリスト教は、・・・論理の結論であるよりは体験であり、イデオロギーのようなものよりは生き方である。(152)

苦しみとか死は、機械がぶっこわれたというのとは違う。創造主と人間とのつながりのいつまでもつづく劇の一部なのである。「正当化できない侵犯」やとんでもないことなのではなく、われわれ人間の条件をあらわし、価値を高めるものなのである。おごる人間の頭が愚かにも信じているように、もしも苦しみをなくし、死すべき人間の一生から死をもなくすことができたとしたなら、人の一生の価値が高められるどころか、かえって低められて、生きるかいない、あまりにも無意味な、平凡なものになってしまう。(156-57)

カトリックの「位階制や司祭職」の制度への不信、人間を機械と見做す唯物主義への疑問、そして「論理の結論よりは体験」を、「イデオロギー」よりは「生き方」を重視する立場に、サンチョとの類似が見出せる。他方、マザー・テレサは、キホーテ神父の如くリジュの聖テレーズを敬愛して居たが、その死

後に刊行された書簡『来て、わたしの光になりなさい!』の中で、これ又キホーテ神父と同様の、神に対する深刻な懐疑と不信、苦悩の歳月を克明に記録して居た。成程オーウェルが切り捨てた様に、「聖なる罪人の礼讃は下らない」(Vol. 4, 499)かも知れないが、グリーンならこの手紙に多大な関心を寄せたのではないか。カトリックの有名な修道女と元共産主義者の作家との間の奇妙な友情、並びに前者の深い懐疑や絶望と後者の恐れや不安とに関連して、我々には意外な「聖なる罪人」なる系譜の実例を紹介した。2007年8月23日付け『タイム』誌は、「マザー・テレサの信仰の危機」と題する記事を掲載し、その「空虚と無信仰と愛の不在と熱情の不在」(Van Biema 4)に就いて、詳しく報じて居る。

オーウェルの『カタロニア讃歌』に明白な様に、スペイン内戦の勃発により国内の分裂は激化し、労働者は教会を「搾取、貧困、飢饉、戦争と疫病」(Vol.1, 423)の容認派と見て憎悪して居た。有能な官吏や富裕な成功者の印象故か、オプス・デイ会員に対するグリーンの反感や皮肉が彼の小説からは感じ取れるのだが、この運動の創始者ホセマリア神父はタクシー運転手に、内戦中に死んで居たらよいのに、と面詰された由。しかく『キホーテ猓下』の神父は、共産主義者サンチョには恨み骨髓の仇敵である。度々激しく対立するが、共に旅する道中で次々と騒動を巻き起こし、治安警備隊に追跡される羽目に陥りながら、「相互に理解」しようと努め、堅い友情で結ばれて行く。キホーテ神父は最初、この道連れを原作のサンチョの如き「単純な男か鋭敏な男か」(続編二 114)、懐疑的な教条主義者かと怪しんで居たが、やがて「もはや従士どころかわしの血を引く倅も同然」(続編三 295)とて信頼する様になる。出立の際に神父が告げた「大きな裂け目が我々を分け隔てて居る」(Greene 37)との疑問は解消し、「二人には何かしら共通点がある」(44)から、相手の信条に素朴な疑問を投げ掛けても「敵意を懐かずに議論する事」(48)も出来た。サンチョが好む「同志」の呼称を拒絶して「友よ」と呼び掛ける神父には、共産主義であれカトリックであれ、如何なる組織でも、同じ思想内部の抗争から凄

まじい粛清が為されて来た事が、よく理解出来て居た。キホーテ神父を「迫害する」のは同じ教区の司教と有能な秘書なのだし、この神父の愛読書の多くが、カトリックの同じ会派の兄弟姉妹から非難や弾圧や拷問を受けた聖人達の作品である。サンチョはサンチョで、スペイン内戦時に、オーウェル同様ソ連の卑劣な裏切りを経験したから、大陸の「同志」を一切信用して居ない。詰り、「二人に共通する何か」、イデオロギーの対立や敵意を乗り越えるのに必要なものとは、「同志」や「兄弟姉妹」には希薄だが、「友達」同士には豊かに存在する相手への誠実である。

それはL・トリリングが *Sincerity and Authenticity* の中で分析した、他者への道義的義務を重んずる態度ではないか。この評論は他者への道義的義務と自己の把握した真理とを対比して、どちらに重きを置くかを文学史的に博引傍証した批評である。トリリングの論じた「誠実」とは、「自己自身の自我に忠実たる事により、どんな人間に対しても不実になるのは避ける」(5) との含意であり、その「個人的な在り方は、最も厳格な努力無くしては達成し得ぬ」(6) ものである。それに対して「ほんもの」の自負は、「社会環境に関する遥かに受け入れ難い冷たい見方」(11) を含み、「ほんものたる事は、究極の孤絶と、それが厚顔にも齎すとされる権力とを通して達成される」(171) との矯激な信念を包摂して居る。即ち、他者への接し方が対蹠的であり、前者が敵に対しても忍耐や寛容の「厳格な努力」を要求するのに比べ、後者は仲間に対してすら容赦無い制裁を課して自己絶対化の傲慢を助長する。前者は道義と内省を齎し、後者は正義と粛清を求める。それ故、キホーテ神父とサンチョとは同様の懐疑を懐いて「自分自身と苦闘するのみ」(59) だが、教区司教と秘書や大陸の共産主義者らは、正義を盾に精神病院や強制収容所の「恐怖による支配」(74) を望む。この点、司教秘書のヘレラ神父が神の正義を強調し、「地獄への言及が十五回もある」「マタイ伝」(58) を好む潔癖な人物であるのは、頗る象徴的である。

「ほんもの」の正義を所有したと自惚れた人間は、他者への誠実な義務を軽

視する。トリリングが『誠実とほんもの』の結論で辛辣に批判した如く、その様な偽物がキリストの様に「仲裁の手間をかけ、自らを犠牲にし、律法博士を説得したり、説教をしたりして、弟子を持ち、結婚式や葬式に出向いて、大事を始め、定められた時に『事畢りぬ』と語る」(172)、そんな骨折りを引き受けないのは、理の当然である。他方、『キホーテ猥下』中に登場する大勢の宗教家や思想家然り、後のマザーテレサ然りだが、イエスの刻苦を模倣し原点に立ち返らんとする実務に精力的な行動家は、身内からの激しい抵抗や反発を受け弾圧される。その「殉教者」の著作こそがキホーテ神父の「騎士物語」となり、サンチョの場合も、マルクス主義以上にスペインの懐疑的な哲学者ウナムノの思想が、彼の人生を決定する聖典となる。

キホーテ神父の「最も信頼する古い書物」(40)は、十字架の聖ヨハネ、聖テレサ、サールの聖フランシスの諸作品と福音書である。これらの書物は旅の友として愛車ロシナンテのトランクに大切に収納される。十五回程も生命を危険に曝されたサンチャゴ・デ・キューバの前大司教アントニオ・クラレットの名も、サンチョとの会話の最中に想起される。アヴィラの聖テレサに就いては、聖遺物の指と大元帥フランコとの関係(89)が話題に上り、一時旅の目的地となる話もある。「キホーテ神父が最も価値を置いた古書の一冊」(102)がアウグスティヌスの『神の国』である。キホーテ神父と司教との関係が険悪化した際に、心を慰めてくれた少女「マーティン」(104)とは、リジュの聖テレーズの事だ。神父の愛する聖テレーズとサンチョの前の恋人と、「死んだ二人の女性が両名と一緒に旅を続けて居るかの様」(105)だと、グリーンは書いた。虜囚の身となる神父は、「神学生時代に時々慰藉を見出して居た」(180)聖アウグスティヌスの『告白録』と、静寂主義の異端かと疑問視されたイエズス会のコサード神父の『靈的書簡』を取り出して心を落ち着かせる。トラピスト修道院で保護されて亡くなるキホーテ神父に共感出来るのは、デカルト研究の末に修道士となるレオポルド神父なのであり、疑惑の目を向けるのが「イグナチオ・ロヨラの生涯と作品とに関しては最高権威」(235)であるアメリカ人教授

である。逃避行の間、サンチョとの会話に触発され、これら聖人、哲学者の言葉がキホーテ神父の脳中を去来する。

興味深い事に、十字架の聖ヨハネとサールの聖フランシスとに関して T・S・エリオットが「パスカルのパンセ」の中で、パスカルを推奨する前に次の様に説明した。「十字架の聖ヨハネの様な偉大な神秘家は、主に確固とした目的を持つ読者に向いて居る。サールの聖フランシスの様な信心深い作家は、主に既に神の愛を意識的に熱望して居る読者に向き、それに偉大な神学者は神学に関心の有る読者に相応しい。」(163) エリオットの薦めに依れば、パスカルこそキホーテ神父に一番相応しいが、職業柄、彼が聖フランシスを熟読した事に不思議は無い。だが、神父がこの聖人達の本を「よく耽読したから、哀れなマルクスの時折示すブルジョワへの称賛の念を少しばかりこじつけて解釈して居る」(126) と、グリーンは書いたのである。マルクスのブルジョワ憎悪は恐らく「愛の裏返し」なのであり、「愛したものに長らく拒絶されて来た」(126) からだと神父は指摘する。

ここに己の境遇を重ねて、「愛したものに長らく拒絶されて来た」にも拘らず敵意を向けぬ、十字架の聖ヨハネや聖フランシスの強靱な精神が好対照に暗示される。十字架の聖ヨハネは1577年、所属会派の修道士の不当な告発により監禁せられ、獄内で侮辱と虐待を受けたが、翌年8月夜陰に乗じて脱獄し、他の修道院に身を潜める。理解されぬ孤独を甘受する事になるが、それでも彼は激しい苦言を残した、曰く「自分で自分の敵になること」(東京女子足跡カルメル会54)、「辛苦を愛すること」(56)、「自分に信頼する者は、悪魔よりも悪い」(78)等。サールの聖フランシスも大差の無い逆境に居た。浩瀚な『神愛論』を物したこの柔和な司教は、ジュネーブに於てレーニンやスターリンの如き矯激な「カルヴァンにどう対応して行けたのか」(91)、キホーテ神父には不思議で仕方がない。無論、現実の布教は困難を極めた。「石を投げられ、暗殺未遂が数度あり、狼に襲われる」命の危機にも遭遇し、「敵の策略からの出口は見当りません」(浦田 232) と、この「魔術師、ペテン師、教皇主義者など

と非難」(浦田 233) された聖人は嘆いた。

面白いのは、その崇敬する聖フランシスの言葉が、キホーテ神父に愛の不能を悟らしめる経緯だ。『神愛論』の一節が普段の様に神父を慰める所か、追及する結果となる。磁石が鉄を引き付ける結合の描写を通して、美德への共感による愛の一致を暗示した箇所をキホーテ神父は読む。「次に続く借問が神父の心を刺し貫いた。『この生命無き石の中にも象徴せられし躍動せる愛の全体を、汝見ざりしか。』」(140) サンチョと一緒に「乙女の祈り」なる題名のボルノ映画を見て、交合する男女の律動する場面にも無邪気に大笑しただけのキホーテ神父は、「人間の愛を感じる事が出来ない」としたら、猶更「神の愛を感じずる事など不可能であるに相違ない」と悩む。情欲に煩悶する事も「誘惑される事も無い私が、どうして悪に抵抗する為に祈れるのか。その様な祈りの中に美德は存在しない。神父は祈りのうちに全く孤独であると感じた。」(141) 『ドン・キホーテ』の原作に「第三十三 とてつもない物好きの小説が読まれる章」があり、そこには誘惑の試練を受けぬ美德や善良に対する不信が描かれるのだが、キホーテ神父も亦、悪事を為す機会が無いから偶々善良であるに過ぎぬ己に真価を認められず苦悩する。性愛の卑俗な話題が宗教的な愛の難題へと漸次昇華して行く巧みな描写は、グリーンの腕の見せ所だ。

性の誘惑はキリスト教の伝統的テーマである。『キホーテ猥下』の終盤で、トラピスト修道院の聖堂内に「茂みの中で身動きの取れない裸の男性の相当醜悪な絵画」(237) が掛けられて居るのも、その好例である。恐らく聖ベネディクトが肉欲の悪の誘惑に負けまいとして自ら激痛に身を苛む構図だ。どれ程醜悪に見えようと、克己主義の過激な苦行を無頓着や妥協より潔しとする苛烈な伝統精神の裡にキホーテ神父は生きて居る。「茨垣を裸身で潜る」なる奇異な格言は、西洋の正統思想では至当でも、緩和穏当を好む吾が日本文化には馴染み難い極端である。日本とは全く異なる『神の国』を論じた聖アウグスティヌスは、肉欲に執着して居た過去を正直に告白した「罪人であり聖人であり」、「詩人でユーモアの解る人」でもあり、「性に就いても経験から書いた」(102)。そ

のアウグスティヌスが不能に就いて説明した箇所を、キホーテ神父は「性欲を抑制する」「自然な方法」だと誤解し愛すべき無知を示す。知らずに宿泊した売春宿では、避妊具を風船と信じて膨らませて遊び、サンチョを呆れさせた一件と同断である。海千山千のサンチョにしてみれば、キホーテ神父は「異様だし、人間らしくない」(103)不具者なのである。

尤も、この神父がドゥルシネアの様な守護の姫「マーティンと呼ばれる少女」に「守られて来た」(104)事は確かだが、それはサンチョが期待する様な恋愛沙汰ではなく、リジュの聖テレーズの手紙に関する読書体験に過ぎない。司教に苛められた時にキホーテ神父を大いに慰めたその理由は、聖テレーズも亦、支配欲の強い修道院長に徹底的に疎まれ苛め抜かれた経験があるからなのだ。この孤独な少女は重い結核と深い宗教的懐疑心とに苦しみながら、二十四歳でこの世を去る。その狭い日常に於けるささやかな愛の実践に、キホーテ神父は心から敬愛の念を懐いて居た。それ故、毎日テレーズの言葉を嘔みしめて「剣により死ぬより先に、幾度ものピンの刺し傷で死に」行かん(104)とて、日常茶飯事に小さな自己犠牲を重ねようとする。十三歳の聖テレーズの座右の銘は、十字架の聖ヨハネの「苦しむ事、そして、蔑ろにされること」(菊地64)であり、後にマザー・テレサは彼女を守護聖人に選ぶが、両者は十字架の聖ヨハネの神秘的な「信仰の暗夜」と呼ばれる、神の存在そのものに対する抜き差しならぬ疑念を共有して居た。

キホーテ神父にも元市長のサンチョにも、それぞれの信条に対する打消し難い疑念がある。自らを不遜にも義認する信条に悩み、所属組織の圧迫的な支配に苦しみ続ける。だが、決定的な相違もあり、薬屋の娘の魅力に負けて神学校の学問を棄てたサンチョが、食欲、性欲ともに天晴れな位旺盛で生氣溢れるのとは比べると、うぶなキホーテ神父は、何とも柔弱なお人好しに見える。愛車ロシナンテへの愛情は有るが、肝心要の人間への愛情が湧かず、性の欲望は欠如して居て悪の誘惑にも無縁である、その事が神父を苦しめる。この神父が恐れたのは、教区司教などではなく、自己の存在意義を否定する様な不適格の烙印

に絶望する大罪だと悟るのである。

所で、サンチョが信奉するマルクス主義の疑似キリスト教的な要素を、ベルジャーエフは剔抉した。それは「光は闇を通して獲得されうる」(224)、善には悪が必要であるとの思想である。「完全な生」の実現には「闇が濃くならなければならない」とするこの思想の特徴は、殆ど十字架の聖ヨハネやアヴィラの聖テレサの「信仰の暗夜」なる神秘主義の神学を、政治的に焼き直した不気味なパロディーと評し得る。ここで『キホーテ猓下』の扉にグリーンが掲げたハムレットの台詞「良い悪いは當人の考へひとつ、どうにでもなる」を想起する事は意義がある。「當人の考へひとつ」で「どうにでもなる」なら、自己の正義が万事裁量する倨傲へと突き進むか、事の成果は人知を超えた神の摂理だから謙虚に天命に委ねるか、両者の間には天地の開きが有る。原作のドン・キホーテも「暗闇ののちに光明を待つ」(続編三 282)と説くが、これはサンチョを鞭打つ為の懲罰的な牽強付会である。ともあれ、マルクス主義とキリスト教との酷似を認識して居たベルジャーエフが論じた通り、ソヴィエト共産主義の哲学者は『『戦闘的哲学』の戦士であり、多くの点でカトリックの神学者に似て」(238)居り、「ソヴィエト哲学の構造全体が、キリスト教のぞつとするような戯画」(244)なのだ。それ故、キホーテ神父とサンチョとは独善的支配に抵抗する「誠実」な求道者同士、猓下の襟を貸し借り出来る仲の「一種の司祭」(Greene 105)友達になり得たのである。

グリーンは聡明なサンチョに意図と結果とを区別せしめ、両者の因果関係を否定させて居る。人間の思想信条と実践行動の結果とを峻別させ、「我々は皆、自分の意図した事の残酷なパロディーを作るのです」と「悲しみと後悔の調子を籠めて」(222)語らせた。善を目的に為した必要悪が、善には非ず大なる悪を齎したとしても、神ならぬ人の身に未来を見通せる筈がない。サンチョとキホーテ神父とは、共産主義の人権侵害や強制収容所と、カトリックの異端審問や精神病院収容の話題には触れない事を取り決める。トリリングが『誠実とほんもの』の中で述べた「ほんもの」なるギリシア祖語の「激烈な意

味」が想起される所だが、それは「完全な支配力を持つ」事と「殺人を犯す」(131) 事を意味するのである。キホーテ神父を精神病院に入れようとする司教は、聖パウロのテトス書第1章10節から11節の「服従せず、虚しき事を語り、人の心を惑す者おほし。… 彼らの口を箝がしむべし。」(185) を引用するが、これはスターリンの肅清命令としても通用する。

「ほんもの」の真理を有すると公言する教会や共産党の組織に対する不信が、キホーテ神父と元市長のサンチョとを結び付けて居る。そして、この両組織への愛憎半ばする複雑な反応を示して、若かりし神学生サンチョに強烈な印象を残したのが、スペインの哲学者、詩人、小説家のウナムノである。ウナムノがドン・キホーテを敬愛し、その冒険を考察した事は、サンチョの指摘する通り周知の事実だが、キホーテ神父も亦、「垂れた臉が荒々しさと個人的思考の傲慢とを表して居る」ウナムノの石像を「その名を繰り返しながら、敬意を籠めて見上げた。」(111) キリスト教徒には異教徒を、共産主義者に対してはキリスト教を称賛し相手を挑発し、「ウナムノ党が組織されたら、私が真先に『反ウナムノ派』になる」(Books: Dream Us, 2) と放言した天邪鬼であり、教条主義や党派心を何より憎んだ彼の顔は、「荒々しさと個人的思考の傲慢とを表して居る」のである。ウナムノは小説「殉教者、マヌエル・ブエノ」の中で、聖人と呼ばれ人望厚い神父が、その心底に無神論を蔵して居る二面性を描いて居り、その粗筋は、インドの底辺で真摯に奉仕を続けながらも神の存在が信じられなくなり苦悩するマザー・テレサの暗夜の人生を髣髴とさせる。この小説は1931年刊行時に醜聞となり、ウナムノの名は禁句となる。心酔するサンチョの言葉、「大勢の司祭がウナムノの死を聞いた時、安堵の溜息を洩らし、事によると教皇も彼が死んで安心した」(111) に相違ない、との発言も強ち誇張ではあるまい。風車に突撃するドン・キホーテの如く、ウナムノも教会から厄介な論敵と見做されて来た。

ウナムノの知的な青年に対する影響力の大きさと、人生に於ける懐疑の重大な意義とに着目させられる場面がある。マルクスの教条主義の上に胡坐をかい

て居る様に見えたサンチョを、キホーテ神父が「慣れない怒りに」身を任せ、お前には「絶望の尊さ」(112)が解らぬと叱りつける。その後、サンチョは「信仰心への両面価値を懐きながら、カトリック教会に留まり続けた」往時の回想を語る。夢の中でウナムノの講義の声を聞いたのである。「くぐもり声がする、信者の耳に囁く不確かさの音が。誰に解るか。この不確かさ無くして、どうして我々は生きられるのか。」(112)ここに現れる「絶望の尊さ」と「不確かさ」とは、ウナムノの思想を語る上で鍵となる言葉である。感情と合理主義、信仰と理性とは、キホーテ神父とサンチョとの対話の如く果てしない死闘を繰り返す。真理を求める長く和解の無い葛藤の「不確かさ」にウナムノは絶望的になる。けれども、それこそ「知性の最も高貴で、最も深淵で、最も人間らしい、肥沃な状態」(Books: Dream Us, 1)だと主張する。ウナムノは調和や妥協の「不毛な安定性」を憎み、「心と頭が和平を結ぶのを望」まず、「内的な矛盾」の原理に支配された人生を格闘し続け、「闘争に魅せられると同時に、静寂と平和を渴望し」(マシア 118)た。

切実に真理を求めるウナムノの不撓不屈の精神には圧倒されるが、この誠実に葛藤し続ける精神は、十字架の聖ヨハネやアヴィラの聖テレサの神秘主義に根差し、イエズス会を創始した元軍人の聖イグナチオ・ロヨラが反宗教改革の礎にした合理主義にも由来する。異端と評されたウナムノの剛直な探求心の源泉は、原作のドン・キホーテに劣らず聖イグナチオや聖テレサも愛読した騎士物語を介して、酷い弾圧を身内から受けた聖人達の剛毅な精神にまで遡る。ウナムノは聖テレサを称賛して書いた、「我々は魂を残す。どんな組織であれ、どんな『純粹理性批判』であれ、サンタ・テレサに勝るものはない。」(パソス 231)と。

十字架の聖ヨハネは、無味乾燥と暗黒と沈黙の内に放置されても忍耐する事が靈魂を浄化する道だと確信して居たから、不愉快を求めよと助言し、自ら実践した。「死んでもよい、負けてはなりません」(ルノー 21)と書き残した聖テレサは、猛抗議にも負けず十七もの修道院を創設し、「死か生か」、「闘争か

平和か」、「地獄か天国か」(アビラ 329-330) 全てを甘受すると神に切願した。聖テレサは幼少期に騎士物語を耽読した挙句、七歳にして殉教を志し、聖イグナチオが修練法を記した『靈操』を読んで居た。その聖イグナチオにしても、『キホーテ猯下』の序盤にキホーテ神父に出立を勧める司教が述べた様に、「大勢の人が狂人と呼んで居た」(24)のである。吉田小五郎の略伝に依れば、「鐵石の意志と、深く人の胸に食ひ入る魅力と、我が身を忘れて人のために盡す誠意とがよく人の心を射た」(391)イグナチオだが、「彼の言動は疑の目を以て見られ、宗教裁判所の忌憚にふれて三度まで投獄されたほどであった」(388)。「彼は迫害を受けたが、所謂『ドン・キホーテ』的の情熱でよく耐へた」(392)と語られる。「價值無き愚者と見られたキリスト」(イエズス会 76)の如くならんと望むイグナチオは、「キリストの弟子たる者は迫害を受ける」(イエズス会 238)べしと覚悟を決めて居た。トマス・ア・ケンピスの『キリストの模倣』が彼の愛読書である。

かくして共に狂人と見做された、先祖のドン・キホーテと聖イグナチオとに触発されたかの様にキホーテ神父は旅に出て、ウナムノの弟子を自負するサンチョと寝食を共にし、最後にはトラピスト修道院でデカルト信奉者のレオポルド神父と、聖イグナチオの研究者とに見守られながら、無意識にミサを捧げ死んで行く。デカルトと聞けば、聖イグナチオの起したイエズス会との反目が有名だが、その合理主義の学問の基礎はイエズス会の学院にて修得されたものである。デカルトの『省察』に語られる、疑問の余地ある一切を排除して行く方法は、「聖イグナチオが『靈操』中で導いたのと何か似た方法で」(Sorrel 57)為されたとの指摘がある。異論もあるが、「方法的懷疑」を実践する段階が「靈操のはじめにある全ての愛着を除去する」「行為の実践」(下野 150)だと解する学者も居る。田中仁彦は、デカルトの懷疑の手法を『『暗夜を一人行く』がごとき手探り』(326)と評した。この信仰と理性との近接を考慮すれば、デカルト流の合理主義から信仰の道へと「飛躍」したレオポルド神父の改心の道程も不思議ではない。現実世界には、現象学のフッサールの高弟で気鋭の学者

エディット・シュタインが、アヴィラの聖テレサの伝記に感銘を受け、父祖伝来のユダヤ教からカトリックに改宗し修道女となり、アウシュビッツで殉教した事例がある。理性対感情、合理主義対信仰の単純化した二項対立は、安易な偏見に過ぎぬ事が解る。

この辺で、『キホーテ猯下』に登場する重要な聖人や哲学者の時代的な繋がりをまとめておく。4世紀のアウグスティヌスは別格として、聖イグナチオは16世紀前半に活躍し、少し後にアヴィラの聖テレサと十字架の聖ヨハネが続く。『ドン・キホーテ』の作者セルバンテスは、十字架の聖ヨハネとほぼ同時代人である。16世紀後半から17世紀の二十年間、聖テレサを仰ぎ見たサールの聖フランシスが活動した。この穏和な聖人より三十歳位若い天才がデカルトである。聖アントニオ・マリア・クラレットは19世紀に召命を受けて働き、最後の四半世紀に入れ替る様に、リジュの聖テレーズが二十四年の短い生涯を燃え尽した。哲学者ウナムノの人生は、その聖アントニオの晩年と聖テレーズの一生と重なり、スペイン内戦の始まる頃までであり、その勝者フランコは、アヴィラの聖テレサの聖遺物である薬指を死ぬ迄、「満腔の崇敬を以て、机の上に保管し」(Greene 89)、20世紀の四分の三を生き延びた。そして、この大元帥の同時代人に、聖テレサに靈感を受けたエディット・シュタイン（十字架の聖テレサ）が居り、ナチスに殺害された。20世紀の半ば以降、マザー・テレサが登場し、その慈善事業の活躍をマゲッリッジらに報道され、死後には神への懐疑的な書簡が公表されて世紀末に大きな注目を集める事になる。これら聖人や哲学者の間の、著作を介した人格的な影響関係の系譜に、グリーンの『キホーテ猯下』は立脚して居る訳である。

現代の我々には、デカルトの合理主義や個人主義ばかりが目を引き。堅固な個人主義の所為で、彼は神の恩寵よりも自由意志を重んじた異端の如く評された。けれども、小林秀雄が見事に述べた様に、「これほどよく自分を信じて、よくもこれほど自己満足からも、自己欺瞞からも遠ざかる事が出来たものだ」とその稀有な美質に瞠目し、その「自己を信じて無私を得た生きた人間」

(342)に賛嘆すべきではないか。デカルトは、「ほんもの」の真理を掴んだと確信した者の陥りがちな独善を免れた「誠実」な人である。グリーンは作中に、デカルトが「盲人向きの治療法を見つける為に眼鏡の改善に取り組んだり、肢体の不自由な者を助ける為に車椅子を手掛けたりする現実的な人」(236)たる事を忘れずに書いた。

そして、左様なデカルトに心酔した、『キホーテ猓下』中のレオポルド神父なればこそ、キホーテ神父の辛い懷疑の意義も苦しみも理解出来たのである。興味深い縁だが、この神父最期のミサを見守るのは、デカルト信奉者のレオポルド神父と、デカルトの合理主義を批判して感情を重視したウナムノの弟子サンチョと、デカルトが研鑽を積んだ学院の創始者たる聖イグナチオを研究する学者である。これを理想主義の騎士ドン・キホーテに準じて形容すれば、ドン・キホーテの懷疑的な末裔を取り囲むのは、知性の先駆者と、感情の闘士と、信仰の兵士との、各々の分野に於ける不才の後進に他ならない。この感情の闘士の不肖の弟子は、知性と信仰との間を激しく揺れ動き、主役の懷疑的なドン・キホーテの子孫と次第に一心同体化して行く。教会と世間から見れば、窃盗と騒乱の罪で追跡された逃亡中の精神障害の神父が、自損事故の果てに錯乱状態で不名誉な頓死を遂げたに過ぎない。然し、文字通り生命を賭した友愛の実践と必死の応諾とは、主人公の神父の心に平安を齎し、残された従者には大きな不安と疑問とを抱かせる結果となる。放蕩息子の様にサンチョが帰教するか否かは解らない。現実のマゲッリッジは、マザー・テレサのTV取材の後、不思議な影響を受けてカトリックに改宗したのだが。

キホーテ神父の生と死は、ドン・キホーテの生涯を、敷衍すればキリストの生と死をなぞる様に進行する。換言すれば、それは祖先からの肉体の源泉と信仰の精神的な原点とを、実生活の中で模倣し再現する行程である。原典のキホーテが最期に騎士物語を棄てて正統信仰に戻る結末とは逆に、キホーテ神父は臨終の床で、己の騎士物語たる福音書や諸聖人の著作を放棄するかも知れぬ(140)事を恐れる。元市長のサンチョは、痛飲した神父が自己の信仰の正統性

に疑問を懐いて居ると告げたのを聞いて夢の中で、十字架上のキリストよろしくこの友人が「祭壇の一番上に聖像の如く留められて居り、会衆が嘲笑し、キホーテ神父が泣いて居る」(164)様子を見る。愛する事を否定された空虚な生と、限りなく絶望に近づく悲惨な死とを再現する事が、この神父の使命となる。キホーテ神父は、「宗教裁判所の迫害者」(207)トルケマダの如き司教からミサの司式も告解の聴聞も禁じられ、精神的な「死刑宣告」(208)を受けて居た。ミサの山場、最後の晩餐の変容(化体)の神秘も、もう再現出来ぬ。覚悟を決めた神父は、マリア像の山車に張り付けられた数多の紙幣を見るや、あれ程嫌悪した猥下の称号を名乗り、拝金主義の強欲と対決する。マリアの苦悩が「金集めの為」、「司祭を裕福にする為」(227)であるかの如きお祭り騒ぎに対し、心底から憤怒が込み上げ、神殿を汚す両替商を叩き出すキリストの狼藉をなぞるのである。

マゲッリッジは『イエス—今に生きる人』なる評伝の中で、キリストとドン・キホーテとの類似性を強調した。前者が旧約の「預言に記された手順をすべて」為し「作法」通りに行動したのと同じく、後者は「騎士の修行をすべてやりとげ、騎士の鑑」(143)たるに相応しい冒険に臨む。だが、共に本物のメシアや騎士の「奇怪なパロディー」と見做され、「危険な狂人」(144)と呼ばれる。牛島信明はドン・キホーテとキリストとを比較して、「両者が共に《言葉》から生れた存在であり、さらにすでに《書かれて在る》ことを実現するための存在」(1)たる事を力説し、高橋英夫の『花から花へ』の明察、「人間の行動、思考、表現は」、「既に存在したものの再発、継続なのではないか」(2)を効果的に引用した。歴史上のドン・キホーテ観では、「滑稽なキホーテ」、「天晴れなキホーテ」からロマン主義の英雄的キホーテ像へ移り、近代以降、「象徴的なキホーテ」の中にドストエフスキーが探求した様な「新たなキリストの如き人物」「聖なるキホーテ」(Pardo 36)が登場する。グリーン『キホーテ猥下』はこの系譜に連なり、死者の言動の絶大な影響下に、生者が模倣と再現を試みる。その意味では、キホーテ神父の亡くなる12世紀の修道院が、「過去

の文明の廃墟の中に我が家を建てようと、今努力して居る冒険家の小集団により、漸く最近入植された島」と形容され、夜の闇に浮かび上る過去の教皇や騎士達の木像が「悲しい記憶の様に」「生の風采を帯びる」(233)と描写されるのは、死者と生者との濃密な関係を明示して居て興味深い。始めにキホーテ神父を昇進させ出立を急かす司教が詠む催促の詩句、「去年の古巣に今年は鳥の居らぬもの」(24) (続編三 339) に関しても、未来志向の挑戦の期待より寧ろ、過去への愛惜の情を反語的に表した詠嘆に感じられてならない。

『キホーテ猓下』の後半は、特に死と懐古との象徴に満ちて居る。フランコ総統の大霊廟にウナムノの小さな箱の墓、事故死したらしい視学官の「古代ケルト十字架の様に見える」(232) 碑石。愛しい模範を過去に求め、死者を今に生かさんとする様々な想起方法がある、その西欧精神の血脈は偉観だ。作中に出たサン・アントニオ・デ・ラ・フロリダ聖堂(73)には、ゴヤの描いたパドアの「聖アントニオの奇蹟」の天井画がある。己を見つけようと生涯苦闘した、この失せ物の見出しを祈るべき聖人は、父の無実を証すべく、殺された死者を正に復活させる。けれども、周囲の群衆は「奇跡に気づかない」大騒ぎの狂態を曝し、「敵意をむきだしにして」(シモンズ 197) 愚弄する輩すら見える。キリストからドン・キホーテを経てキホーテ神父、マザー・テレサに迄至る、愛と死との真似びの不可思議を賢しらに嘲笑する合理主義者や、死者の懐想と模倣とによる再現の継承に無関心な大衆を、グリーンはゴヤの様に醒めた目で見て居たのかも知れない。

引用文献

“Books: Dream Us, O Lord.” *TIME*. Jan. 17, 1964.

Eliot, T. S. “The *PENSEES* of Pascal.” *Selected Prose*. Edited by John Hayward, Penguin Books, 1955.

Greene, Graham. *Monsignor Quixote*. Penguin Books, 1983.

Orwell, George. *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*

Volume 1. Penguin Books, 1982.

—. *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell Volume 2*. Penguin Books, 1984.

—. *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell Volume 3*. Penguin Books, 1970.

—. *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell Volume 4*. Penguin Books, 1984.

Pardo, Pedro Javier. “Don Quixote in Great Britain.” *Don Quixote around the Globe: Perceptions and Interpretations*. Edited by Slav N. Gratchev and Howard Mancing, Juan de la Cuesta, Academia, 2020. pp.21-56.

Sorrel, Tom. *Descartes A Very Short Introduction*. Oxford UP, 2000.

Trilling, Lionel. *Sincerity and Authenticity*. Harvard UP, 1973.

Van Biema, David. “Mother Teresa’s Crisis of Faith.” *TIME*, Aug. 23, 2007.

アビラの聖テレサ『神の憐れみの人生 下』、鈴木宜明監修、高橋テレサ訳、聖母の騎士社、2006年。

イエズス会日本管区 ログンドルフ、ヨゼフ編『イエズス會』、エンデルレ書店、1958年。

牛島信明「引用もしくは模倣のポエティックスー『ドン・キホーテ』と聖書の場合」、『東京外国語大学論集』第60号、2000年。

浦田慎次郎『フランシスコ・サレジオと共に歩む 神への道のり』、ドン・ボスコ新書、2013年。

菊地多嘉子『人と思想125 リジュのテレーズ』、清水書院、1998年。

小林秀雄「常識について」『新訂 小林秀雄全集 第九巻 私の人生観』、新潮社、1984。

シェイクスピア、ウィリアム『ハムレット シェイクスピア全集10』、福田恆存譯、新潮社、1962年。

- 下野葉月 “Mathew L. Jones, *The Good Life in the Scientific Revolution: Descartes, Pascal, Leibniz, and the Cultivation of Virtue.*” 『東京大学宗教学年報』26、2009年。pp.147-154.
- シモンズ、サラ『岩波 世界の美術 ゴヤ』、大高保二郎・松原典子訳、岩波書店、2001年。
- 田中仁彦『デカルトの旅／デカルトの夢—『方法序説』を読む—』、岩波書店、2014年。
- デ・セルバンテス、ミゲル『ドン・キホーテ』[続編二]、永田寛定訳、岩波文庫、1988年。
- 、『ドン・キホーテ』[続編三]、高橋正武訳、岩波文庫、1988年。
- 東京女子蹴足カルメル会『十字架の聖ヨハネ 小品集』、ドン・ボスコ社、1991年。
- 日本聖書協会『舊新約聖書 引照附』、1982年。
- パソス、フアン・ホセ・ロペス「『ドン・キホーテ』と現代スペイン哲学—『ドン・キホーテ』の哲学的意義について」、『ドン・キホーテの世界』、坂東省次、山崎信三、片倉充造編著、論創社、2015年。
- ベルジャーエフ、ニコライ『ベルジャーエフ著作集Ⅷ 共産主義とキリスト教』、峠尚武訳、行路社、1991年。
- マゲッリッジ、マルコム『マザーテレサ すばらしいことを神さまのために』、沢田和夫訳、女子パウロ会、1979年。
- 、マザー・テレサ出演『すばらしいことを神さまのために—Something Beautiful for God—』ピーター・シェファー監督、BBC、1969年。女子パウロ会、2010年、DVD。
- 、『イエス—今に生きる人』、西村徹訳、新教出版社、1977年。
- マシア、ホアン『ドン・キホーテの死生観 スペインの思想家ミゲル・デ・ウナムーノ』、教友社、2003年。
- 吉田小五郎「聖イグナチオ・ロヨラ」、『史学』19巻3号、三田史学会、1940

年。pp. 1-19.

ルノー、エマニュエル『アヴィラの聖テレサ 神秘的体験の証人』、前田和子
訳、中央出版社、1983年。

ロベール、マルト『古きものと新しきもの ドン・キホーテからカフカへ』、
城山良彦他訳、法政大学出版、1973年。

The consanguinity of Western traditional faith —Graham Greene's *Monsignor Quixote*—

Kazuyasu Hiramatsu

Graham Greene is a dialectic skeptic who seems to be at once a reactionary Catholic and a moderate Communist as G. Orwell said in his letter. His complex characteristic is impressively revealed in the humorous adventure novel *Monsignor Quixote* in his later years. The main heroes based on the original novel written by Cervantes are the direct descendants of Don Quixote, a rural Catholic priest and Sancho, a Communist ex-mayor. Their journeys and funny conversation are as thrilling and moving as those of the original story because of the hatred between Catholicism and Marxism and because of their affinity of skepticism toward their own faiths. As to the growing friendship, Lionel Trilling's criticism *Sincerity and Authenticity* is a great guide to understand their 'sincere' attitudes to each other and the oppressors' psychology with 'authentic' dogmas.

However, to look below the surface of its polemic dialogue, it is easy to read the subject matter of Western traditional philosophy of love and death from Christ through Don Quixote to Mother Teresa of Calcutta. Father Quixote is to Communist Sancho what Mother Teresa is to ex-Communist famous journalist, Malcolm Muggeridge. We can easily trace the skeptical lineage of Christian mystics and Cartesian rationalists against the stern orthodoxy in his story and modern history: St. Augustine, St. Ignatius

Loyola, St. Teresa of Avila, St. John of the Cross, Miguel de Cervantes, St. Francis de Sales, Rene Descartes, St. Antonio Maria Claret, St. Therese of Lisieux, Miguel de Unamuno, General Franco, Edith Stein, Mother Teresa, and Malcolm Muggeridge. As the latter half of this novel is filled with images of memories of death, the most important concern to Greene seems to recollect and revive the close relationship between the dead and the living.

Some critics point out that Christ and Don Quixote were the equivalent characters in realizing what had been written in such holy books as the Old Testament and the chivalry novels. All saints and philosophers in *Monsignor Quixote* followed in spite of their tragic fate the ridiculed and tortured predecessors by recollecting their wills and imitating the brave deeds.

In San Antonio de la Florida suggested by Sancho, there is a vault painting, "St. Anthony (of Padua)'s miracle" painted by Goya. With a view to showing his father's innocence, this saint revives a murdered man. But the large crowd around him are ignoring with chatter or detesting him jeeringly. With Goya's eyes Greene looks cynically upon the rationalists and the nonchalant as foolish and heartless in his Quixotic novel about the modern serious doubts.

大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
 2. 研究会、講演会および討論会の開催
 3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
 2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
 2. 副 会 長 1名
 3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。
副会長は会長が会員の中から委嘱する。
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
 - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
 - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。

ワードプロセッサ使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

和文フォントとして「MS 明朝」、欧文フォントとして「Century」を使用する。

外国語文の場合はA4判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

原則として、論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 投稿論文の掲載の可否は、2名の査読者による査読結果に基づき編集委員会が判断する。
6. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、2020年4月1日から適用する。

以 上

大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)

7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は2校までとし朱筆のこと。2校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでとくに注意されたい。
 - ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。
 - イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。
11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以上

執筆者紹介（掲載順）

黒 宮 公 彦 情 報 学 部 教 授

平 松 良 康 商 学 部 教 授

編 集 後 記

第85号をお届けいたします。本号には2篇の論文を掲載することができました。ご多忙のところご投稿くださったお二方に心よりお礼申し上げます。

2023年5月8日から新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置づけが「5類感染症」に変更され、基本的な感染対策の継続は必要ですが大学に全面的に対面授業が戻ってきました。コロナ禍では新しくオンライン教材の有効活用などが進みましたが、今後とも否応なしに影響を受けるのが ChatGPT（対話型 AI）の存在です。ライティングの学習において文章構成や表現の改善を提案、ディベートの練習相手として学生に対する主張や反論を提供など有用に使える反面、間違った情報の提供といった負の側面もあります。NY 州の弁護士が ChatGPT で出力した実在しない判例を裁判資料として提出したという事件も起こりました。好むと好まざるとにかかわらずその影響は不可避のため、教育や研究の本質を見失わず賢く共存していくことが求められています。

(K. Y.)

大阪学院大学外国語学会役員

会 長 黒宮 公彦

副 会 長 中田 辰也

編集・庶務委員 川本裕未・笹間史子・平松良康・吉村 京子

大阪学院大学外国語論集 第85号

2023年6月20日 印刷 編集発行所 大阪学院大学外国語学会

2023年6月30日 発行 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

電話 (06) 6381-8434 (代)

発 行 人 黒 宮 公 彦

印 刷 所 大 枝 印 刷 株 式 会 社

吹 田 市 元 町 28 番 7 号

電話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

No. 85

| | | |
|---|--------------------------|----|
| On <i>Watershed</i> | Kimihiko Kuromiya | 1 |
| The consanguinity of Western traditional faith —Graham Greene's <i>Monsignor Quixote</i> — | Kazuyasu Hiramatsu | 21 |

June 2023

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY